

「新型コロナ」という災い

こう全てのホールが閉まり、今年は舞台に関わっていなくてよかった、などと「身勝手な」感想を抱きつつも、一年近くも稽古をした舞台が、突然、「休演」ということになったら、演出家として、また企画者として、どうしただろうと考えると、文字どおり言葉を失うだろう。個人的に言えば、昭和天皇下血が始まった時に、パルコ・PARTⅢで、演劇集団「円」の『真昼に分かつ』の初日を開けなければならなかったという、苦い経験があるから、尚更である。しかも、今回は日本固有の事情などではなく、「世界的」事件なのであるから。

舞台芸術ほど、「一期一会」という言葉が、どの次元を切っても当てはまる芸術ジャンルはない。だからこそ参加者は、必ずしも常に発見ばかりが待ち構えている訳ではない、長い稽古を引き受けるのだし、「本番」になっても、「千秋楽」まで、日々の舞台を、戦いと葛藤の場として生きなければならないのだ。

こんなことは、今更らしく言うまでもない「月並み」だと言われよう。確かにそうには違いないが、自分の身体を賭けて「虚構」の世界を作ろうという「舞台芸術」には、常に心しておかなくてはいけない、まさに「初心」である。「新型ウイルス」の跳梁する「世界」で、この敵との戦いに勝つには、何はともあれ、この「初心」を忘れずに、それに恥ずかしくない「作業」を貫くことをおいて他にはあるまい。

渡邊守章

(演出家・フランス文学研究者)